
退行的進化

加藤健太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

退行的進化

【Nコード】

N6903Q

【作者名】

加藤健太

【あらすじ】

全てはうまくかみ合ってできていた。

幸せは知らないことだったのかもしれない。

僕はあの時はこれが苦しみの始まりだとは知らなかったんだ。

ボクハキミガスキナンダ

大人になる前の少年少女の非日常。

1-1 (前書き)

初投稿です。

誤字脱字には気をつけているつもりですが、個人で書いているものゆえ、ご容赦願います。

多くの人に読んでいただければ本望です。

現在ストーリーの大枠はできており継続して連載を続けていけたらと思っています。

生意気かもしれませんがコメントなどいただけたら、とてもうれしいです。

どうぞよろしく願います。

かつてこの国には、機械が人の代わりに働き、高度な文明が発達していた。日々の生活はすべてがボタンひとつでこなせるようになっていた。

しかし高度な技術は同時に脅威にもなりえたのだった。人が機械を使い機械に殺される…能動的に動くことのない、そんな退廃的な生活に人々は徐々に人間らしさを失ったのであった。

人々は互いにいがみ合った。世界に恣意的に引かれた線を隔てて戦争が無数に起きた。

ある国は肌の色に優劣をつけ自信の尊厳のために隣国を攻め入り、ある国は経済的に服従してきたツケを理由に農作物の輸出をやめ世界を敵に回した。

ひとつの戦争は周辺国を巻き込み、血で血を洗うような抗争が無数に生じた。

これが後に言う第三次世界大戦である。地球の膨張のスピードをはるかに凌駕した文明、技術の進化は犠牲者の数によってその力を示した。

当時69億人も存在した人類は現在10億人までも減少している。政府という軸を失った人々は暴徒化し、今も理由もなしに人々が命を失っている。

これに心を痛めたのがわれ等が主、ゴエ様であり、主は荒れた世界で苦しむ弱者を救済することにしたのである。

主は後に世界を再建するであろうと希望を子どもに託しました。

我々は主に選ばれた、新人類です。

絶望の中、目先の欲望に支配された民を我々が導かなくてははいけません。

よって、新人類は大人になり次第、この教会を後にし外の邪悪な世界へと旅たちます。

われわれの先輩はゴエ様の右手となり世界の浄化に尽力しています。それに備え、教会にいる間はゴエ様の偉業を学び、教えを血肉へと。そして導く者になる以上は規則に従順になることが必要不可欠になります。

僕はいったん空気を吸い込んでから、ノートを閉じた。

ねずみ色の表紙に紺色の製本テープを雑に貼り付けたおなじみの配給ノートは、これまた雑な髪の毛のような字で6年リュウと書かれ更に惨めな様子だった。

何年も前の授業のときにまとめたノートだった。

僕はこのノートをたまに読み直すのだが、その習慣が実は好きではなかった。

そう、僕は運動もそうだが勉強が特にできない。

でもゴエ様の使いとして困っている人々を守らなくてはいけないという信念を貫くために、日々の厳しい規則への不満を押さえ込むにはこれが最も有効だったのだ。

キンコーンカンコーン

いやに湿ったチャイムが響き、僕は立ち上がると余韻のある内に教室へと向かった。

弱気な自分を追い出す。

「僕はできるんだ」

ここは全てが囲まれている。

物理的にも精神的にも僕の知っている全てが閉じ込められている、灰色の壁に。

たぶんコンクリートでできたその壁は気づいたらそこにあった。

僕は外に出たことがないし、ここが僕の全てだ。

上から見ると、この10メートル近い壁が、僕の住む寮と教会それと庭を蛇がとぐろを巻くようにしているのだろうか。

壁はゴエ様が子どもを外部の穢れから遠ざけるために用意したものである。

教えによれば呪いがかかっている壁に触れたものは死ぬことになっている。

小さい頃からさんざん言われてきたし、実際近づこうものなら有無を言わず罰則をあたえられし、あえて近づくほど僕は馬鹿ではない。

つまるところ従順な教徒なのだ。別に死ぬことは構わないとすら思っている。神に逆らうことのほうがよっぽど苦しいはずだ。

いつもどおり、おそろいの白い運動靴を履いて古びた寮から出ようとする。出口で掃除係りの教徒が僕に向かって会釈してきた。小柄で華奢なのに長い黒髪が尖ったラインを丸く包み、唇に妙な色気がある少女……。誰だろう。急いで相手の靴を見てそのつま先に書いてある名前を読み取る。8年　リエ：14歳か…

「以前勉強会でお世話になりました8年のリエです。おはようございますリュウ先輩。」

場の不思議な空気を吹き飛ばすように飛び出した声は照れくさそうにくねくねしているリエからは想像できないほど力強かった。

「先輩はもう卒業してしまふんですね、ここを離れるってどんな

気持ちなんですか」

続けて「わたしだったら寂しくて死んでしまうかもしれません。それに」

「別に何も変わらないよ。それにまだ一週間はいるし」

下を向きくねくねが更に早くなっている。

どうせまた「あのですね、それですね」を繰り返すんだろう。分かってるさ。

「じゃあ、友達と約束してるから先に教会に行くわ。」

毎日コンクリート舗装された道路を歩くと太陽光が新緑のカーテンを通過して日に日に色づく様子が手に取るように分かる。

あと一週間もすればピークに達するはずだ。

そのときには僕は外に出ていて、もうここでは季節の移り変わる様子を見れないのだろう。

8年のエリ、彼女は毎週当番の日に僕に話しかけては時間を奪う。

それも他愛もない話どころか、くねくねした彼女が止まって発言するまでの不毛な待ち時間にだ。

考えてみると僕は彼女のことを避けようと先週誓ったばかりではなかっただろうか。

彼女のために残された時間を割くなんて馬鹿げているとどんだけ思ったか。ある時なんて一時間も付き合わされたじゃないか。

何でこんなことを忘れてしまったんだろう。しかも名前までも。

小さな消えない疑問を滑らせるように目の前の道路は45度傾いた。

教会は多くの教徒ですでにぎわっている様子だった。

いつもどおり1年から6年の男子は庭でサッカーをしているし、1年の男女の代表は2名であいさつ運動なるものを行っている。周りの人間が思い思いに羽を伸ばしているのになんとくだらない力の使い道なんだろう。「おはようございます」なんて言わなくなっちゃって、それぞれの学年は30人しかないのだし、教会全体で360人な

んだから家族みたいなものではないのか。仮にも僕は12年生で一番長くこの教会にいるのだから。

一番まじめそうな11年の女子が僕に微笑んでしっかりとした口調で例の言葉を投げかける。

「ああ、おはよう」

僕は口だけ、いや口にすることもできない程のビビリなのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6903q/>

退行的進化

2011年10月8日18時19分発行